



JPN Class

Online school - 日本語で学ぼう

国語の学習

小学校

五年生

十二月 第①週



学習を始める前に

①必ず用意してください

・国語のノートと漢字ノート

・筆記用具

②注意

・大事だと思われるところはノートに書いてください。

・このビデオで使っているスライドを印刷したい人は、最後のお知らせを見てください。

・「ビデオを止めてください。」と言われたら、ビデオを止めて、先生の指示にしたがってください。



・必要があるときは、ビデオを止めた
り、もう一度ビデオを見たりして
ください。

先週の宿題から

1. 漢字

漢字テストで書いた漢字の復習をしましょう。
新しい漢字／読みかえの漢字の練習をしましょう。

2. 「熟語」について復習をしましょう。

3. 言葉の学習

次のことがから三つ選び、文を作りましょう。

軽快	軽石	口実	口調	口火
節約	節目	正義	正味	正夢

軽快 自転車が軽快に走る。

軽石 軽石で足のうらをあらった。

口実 病気を口実にして学校を休む。

口調 えらそうな口調でものを言う。

口火 私が、反対の口火を切る。

節約 おこづかいを節約してゲームを買った。

節目 高校卒業は人生の大きな節目だ。

正義 正義を守るヒーロー。

正味 このお菓子は正味一〇〇グラムだ。

正夢 昨日見た夢が正夢になればいいのになあ。

漢字テスト

読み方をノートに書きましょう。

謝恩

軽快

口実

口調

正夢

節目

囲む

能率



漢字テスト

読み方をノートに書きましょう。

答え合わせをしましょう。

謝恩

しやおん

軽快

けいかい

口実

こうじつ

口調

くちよう

正夢

まさゆめ

節目

ふしめ

囲む

かこむ

能率

のうりつ

漢字テスト

漢字をノートに書きましよう。

しやおん

けいかい

こうじつ

くちよう

まさゆめ

ふしめ

かこむ

のうりつ



漢字テスト

漢字をノートに書きましょう。

答え合わせをしましょう。

しやおん

謝恩

けいかい

軽快

こうじつ

口実

くちよう

口調

まさゆめ

正夢

ふしめ

節目

かこむ

囲む

のうりつ

能率

雪がしんしんとふっています。

マサエは、おばあちゃんといっしょにこたつに当たりながら、本を読んでいます。

今夜は、お父さんはとまり番でかえってきません。お風呂好きのおじいちゃんは、「この寒いのにー。」と、みんなに笑われながら、さつきおふる屋さんへ出かけていきました。あとは、お母さんが台所で夕ご飯の後かたづけをしてる音が聞こえるだけで、辺りはとても静かです。

風が出てきたらしく、まどのしろうじがカタカタと鳴りました。雪がサラサラと雨戸に当たって落ちていきます。

マサエは、ふと思いついて、台所のお母さんをよびました。

「お母さん、わたしのスキーぐつ、かわいてる。あした、学校でスキーの日だよ。」

お母さんが、水音を立てながら答えました。

「おや、あしただったの。それじゃ、もう一度見てごらん。さつき、新聞紙を丸めて入れといたから、あらかたかわいたと思うけど。」

マサエは夕方まで、友達と近くのおかでスキーをしていました。今日は一度しか転ばなかったの、スキーぐつもズボンも、そんなにぬれないつもりでしたが、帰ってきて見たら、やっぱりいつものようにぐつしよりになっていたのです。

「かわいているといいけどな。あんなにおそくまで、すべってなきやよかった。」

マサエは、独りでそんなことを言いながら台所へかけて行って、しきいに立てかけてあるスキーぐつから、しめっぽい新聞紙の玉を五つ六つ取り出して、手をつっこんでみました。くつの中はじわりと冷たくて、せなかまでぶるっとなりそうです。

「うへえ、つめたあい。お母さん、どうするう。」

「新しい新聞紙とかえてごらん。ひものところも、しっかりくるむようにしてね。あしたまでには、なんとかかわくだろう。」

「かわくかなあ。なんだか、まだびしょびしょみたいだよ。」

すると、茶の間のこたつから、おばあちゃんが口を出しました。
「かわかんかったら、わらぐつはいていきなさい。」
ど、あつたかくて。」

「やだあ、わらぐつなんて、みつたぐない。だれもはいてる人ないよ。だいいち、大きすぎて、金具にはまらんわ。」

マサエは、大きな声で言いながら、たんすのそばに重ねてある新聞紙を取ってきて、くるくる丸めては、せつせとスキーぐつの中につめこみました。ぎゅうぎゅう力を入れておしこむと、ぬれたビニル皮がぽっこりとふくらんで、まだいくらでも入りそうです。おばあちゃんが、また言いました。

「そういったもんでもないさ。わらぐつはいいもんだ。あつたかいし、軽いし、すべらんし。そうそう、それに、わらぐつの中には神様がいなさるでね。」

「わらぐつの中に、神様だって。」
マサエは、新聞紙の玉をすっかりつめこんでしまつて、こたつへもどつてきました。ぬれた物をいじつた手が、つうんとこおりそうです。

「そんなの迷信めいでしょ、おばあちゃん。」
「おやおや、なにが迷信めいなもんかね。正真正正めい、ほんとの話だよ。」

おばあちゃんは、まじめな顔になつて、眼鏡を外しました。

「それじゃあ、ひとつ、わらぐつの話をしてやるかね。わらぐつの中に神様のいなさつた。話いをね。」

そこへ、お母さんも台所をすませて、赤くなつた手をふきふき、こたつに入つてきました。

「どれどれ、わたしも聞かせてもらいましょうかね。ーそういえば、おじいちゃんは、おふろおそいわね。こんでるのかしら。」

「なあに、おじいちゃんは昔から長湯が好きでね。こもうとこむまいと、ゆつくり楽しんでなさるのさ。じゃあ、話そうかね。」

おばあちゃんはそう言つて、雪の音にちよつと耳をすましてから、こんな話をはじめました。



―昔、この近くの村に、おみつさんというむすめが住んでいました。おみつさんは、特別に美しいむすめというわけでもありませんでしたが、体がじょうぶで、気立てがやさしくて、いつもほがらかにくると働いていたので、村じゅうの人たちから好かれていました。

さて、このおみつさんが、ある秋の朝、町の朝市へ、野菜を売りに出かけました。もう冬が近いので、すれちがう人たちも、なんだか気ぜわしそうに前かがみになって歩いていきます。おみつさんの足も、それにつられたように自然と速くなりました。

町へ入るとすぐの四つ角に、げた屋さんがあって、大きなげたの形をした、すすけたかん板が出ています。その前を通るとき、おみつさんはふと足を止めました。入り口近くの台の上に、かわいらしい雪げたが一足かざってあるのが目についたのです。

白い、軽そうな台に、ぱっと明るいオレンジ色のはなお。上品な、くすんだ赤い色のつま皮は、黒いふつさりとした毛皮のふち取りでかざられています。見ただけで、わかいむすめさんの、はなやかな冬によそおいが、目の前にうかんでくるようです。

おみつさんは、その雪げたがほしくてたまらなくなりました。「でも、きつとたかいんだらうな。」

うら返しになっているねだんの札を、あかぎれの指でそつとめくつてみると、思ったとおり、とてもとても、おみつさんのこづかいで買えるねだんではありません。「負けてくれと言ったって、とてもだめだらうしねえー。」

〈言葉の意味〉

つま皮

雨やどろをよけるために、げたのつま先に付けたおおい。

ふつさり

ふさふさしている様を表す言葉。



おみつさんは、しばらくそこに立って、すい付けられたようにその雪げたをながめていました。

「いらっしやい。何をあげますかいね。」

おみつさんがあんまり長いこと立っていたので、店のおくからおかみさんが出てきて声をかけました。おみつさんは、真っ赤になって、口の中で何かもごもごも言いながら、にげるように店の前をはなれました。

けれども、市で野菜を売っている間も、あの雪げたのことが、おみつさんの頭をはなれません。いつもは、よけいな物など、欲しいと思つたことのないおみつさんなのに、どうしたことか、この雪げたばかりは、なんとしてもあきらめられないのです。

市の帰りに、おみつさんは、またあの店の前を通りました。ほかのお客にまぎれて、ちらりと目をやると、赤いつま皮の雪げたは、朝と同じ所に、ちゃんとぎょうぎよくならんでいます。

「ねえ、わたしを買ってください。あんたが買ってくれたら、うれしいな。」

おみつさんには、雪げたがそうよびかけているように思われました。

家に帰つたおみつさんは、思い切つて、お父さんとお母さんに、雪げたのことをたのんでみました。

「なんだ、雪げたなんて。そんなぜいたくなもん、わざわざ買うことはねえだろう。」

お父さんは、そう言つて相手にしてくれませぬ。

「物ねだりしたことのないおみつのことだから、買ってやりたいのはやまやまなんだけどね。――まあ、おまえが町へよめに行くようなことにならねえ。」

おかあさんは、言葉をにごしています。

「姉ちゃんが買うんなら、おらにも買って。」

「きれいな雪げた、あたいもはいてみたいな。」

小さい弟と妹がわいわい言い出したので、おみつさんも、もう自分のねだり事どころではなく、一生けんめい、子どもたちのなだめ役にまわらなくてはなりませんでした。

その夜、おみつさんは考えました。「うちのくらしだって、大変なんだもの。買ってもらえないのも無理はない。そうだ、自分で働いて、お金を作ろう。そして、あの雪げたを買おう。」

おみつさんのお父さんは、わらぐつを作るのが上手でした。おみつさんも、いつもそれを見ているので、作り方くらいは分かります。おみつさんは、さつそく、毎晩、家の仕事をすませてから、わらぐつを作り始めました。

お父さんの作るのを見てみると、たやすくできるようですが、自分でやってみると、なかなか思うようにはいきません。でも、おみつさんは、少しくらい格好が悪くても、はく人がはきやすいように、あつたかいように、少しでも長持ちするようにと、心をこめて、しっかりとしつかり、わらを編んでいきました。

さて、やっと一足作りあげてみると、われながら、いかにも変な格好です。右と左と、大きさもちがうし、なんだか首をかしげたみたい、足首の上のところが曲がっています。底もでこぼこしていて、ちゃんと置いてもふらふらするようです。その代わり、上からつま先まで、すき間なく、きつちりと編みこまれていて、じょうぶなことは、このうえなしです。

「そんなおかしなわらぐつが、売れるかなあ。」

うちの人はそう言って、笑ったり心配したりしましたが、それでもおみつさんは、朝市の立つ日になると、野菜を入れた大かごにそのわらぐつを結び付けて、元氣よく町へ出ていきました。

げた屋さんの前を通るとき、横目で見ると、あの雪げたは、まだちゃんとそこにあります。おみつさんは、その雪げたが、ほんのちよっぴり自分の手のとどく所へ出てきたような気がして、楽しくなりました。



それから、まっすぐ朝市に出てきたおみつさんは、いつものがんぎの下に、むしろを広げて野菜をならべ、そのはしっこにわらぐつを置きました。そして、野菜を買ってくれる人があると、

「わらぐつはどうですね。」

とすすめてみるのですが、こちらはなかなか売れません。くすくす笑ったり、あきれた顔をしたりして、

「いいや、よかったでね。」

と**断る**のはまだいいほうで、なかには、

「へええ、それ、わらぐつかね。おらまた、わらまんじゅうかと思っ
た。」

などと、あけすけなことを言う、口の悪い人もいます。「やっぱり、わたしが作ったんじや、だめなのかなあ。」おみつさんはがっかりして、**不細工**なわらぐつを見つめました。

やがて、お昼近くになって、野菜はほとんど売れてしまったし、あきらめてもう帰ろうかと思っていると、おみつさんのむしろの前に、わかい男の人が立ちました。どうやら大工さんらしく、いせいのいいねじりはちまきに、大きな道具箱をかついでいます。

「あねちや、そのわらぐつ、見せてくぐださい。んない。」

そう声をかけられると、おみつさんは、やはりきまりが悪くなって、「あんまり、みつともよくねえわらぐつでー。」

と赤くなりながら、おずおずとわらぐつを差し出しました。

〈言葉の意味〉

がんぎ

雪の深い地方で、のきのひさしを長く出し、その下を通路にするために使われている木の屋根のこと。

《新しい読み方の漢字》

断る こと

不細工 サイ



わかい大工さんは、道具箱をむしろの上に置いて、そのわらぐつを手にとると、たてにしたり横にしたりして、しばらくながめてから、今度はおみつさんの顔をまじまじと見つめました。

「このわらぐつ、(おまえさん)(作った)おまんが作んなったのかね。」

「はあ、おらが作ったんです。初めて作ったもんで、うまくできねかったけどー。」

「ふうん、よし、もらつところ。いくらだね。」

大工さんはお金をはらつて、わらぐつのひもを慣れた手つきで結び合わせ、道具箱といっしょにひよいとかつぐと、さつさと行ってしまいました。

おみつさんは、初めてわらぐつが売れたので、うれしくてうれしくて、わかい大工さんをおがみたいような気がしました。

その次の市の日までに、おみつさんは、また一つ、わらぐつを編みあげました。前のよりは、いくらか形よくできました。「今度もうまく売れるといいいけどー。」

おみつさんが、わらぐつを持って市に出て、この前のように野菜といっしょにならべておくと、今度はあまり待たないうちに声をかけられました。

「そのわらぐつ、くんない。」

ひよいと顔を上げてみると、まあ、どうでしょう。それは、この間もわらぐつを買ってくれた、あのわかい大工さんなのです。おみつさんはおどろきました、言われるままに、またわらぐつを売って、お金を受け取りました。



その次の市の日も、またあの大工さんが来て、わらぐつを買ってくれました。その次も、またその次も、おみつさんが市に出るたびに、あの大工さんが必ずやって来て、不格好なわらぐつを買ってくれるのです。おみつさんは、いつの間にか、その大工さんの顔を見るのが楽しみになっていました。こんなに続けて買ってくれるのが不思議でもあるので、とうとうある日、思い切ってたずねてみました。

「あのう、いつも買ってもらって、ほんとにありがとう인데、あの、おらの作ったわらぐつ、もしかしたら、すぐいたんだりして、それで、しょっちゅう買ってくんなさるんじゃないんですか。もし、そんなんだったら、おら、もうしわけなくて―。」

すると大工さんは、にっこりして答えました。
「いやあ、とんでもねえ。おまんのわらぐつは、とてもじょうぶだよ。」

「そうですかあ。よかった。でも、そんなら、どうしてあんなにたくさん―。」

すると、大工さんはちよつと赤くなりました。

「ああ、そりや、じょうぶでいいわらぐつだから、仕事場の仲間や、近所の人たちの分も買ってやったんだよ。」

「まあ、そりやどうも―。だけど、あんな不格好なわらぐつで―。」
おみつさんがきょうしゆくすると、大工さんは、急にまじめな顔になつて言いました。

「おれは、わらぐつこさえたことはないけども、おれだって**職人**だから、仕事のよしあしは分かるつもりだ。いい仕事するのは、見かけで決まるもんじゃない。使う人の身になって、使いやすく、じょうぶで長持ちするように作るのが、ほんとのいい仕事ってものだ。おれなんか、まだわかぞうだけど、今にきつと、そんな仕事のできる、いい大工になりたいと思っっているんだ。」

おみつさんは、こつくりこつくりうなずきながら聞いていました。自分といくらも年のちがわないこの大工さんが、なんだかとてもたのもしくて、えらい人のような気がしてきたのです。

それから、大工さんは、いきなりしやがみこんで、おみつさんの顔を見つめながら言いました。

「なあ、おれのうちへ来てくんないか。そして、いつまでもうちにいて、おれにわらぐつを作ってくんないかな。」
おみつさんは、ぽかんとして、大工さんの顔を見ました。そして、しばらくして、それが、おみつさんによめに来てくれということなんだと気がつく、白いほおが夕焼けのように赤くなりました。

「—それから、わかい大工さんは言ったのさ。使う人の身になって、心をこめて作ったものには、神様がはいっているのと同じなんだ。それを作った人も、神様とおなじだ。おまんが来てくれたら神様みたいに大事にするつもりだよ、ってね。どうだい、いいはなしだろ。」
おばあちゃんは、そう言ってお茶を飲みました。

「ふうん、それで、おみつさん、その大工さんのところへおよめに行ったの。」

マサエが、目をくりくりさせてきました。

「ああ、行ったともさ。」

「それで、大工さん、おみつさんのことを、神様みたいに大事にした。」

「そうだねえ、神様とまではいかないううだったけど、でも、とてもやさしくしてくれたよ。」

「ふうん、じゃあ、おみつさん、幸せにくらしたんだね。」

「ああ、とっても幸せにくらしてるよ。」

「くらしてる。じゃ、おみつさんて、まだ生きてるの。」

「生きてるともね。」

「へえ。どこに。」



おばあちゃんは、にこにこして笑っています。マサエは、お母さんの顔を見ました。お母さんも、にこにこ笑っています。

「変なの、教えてくれたっていいでしょ。」
そこで、お母さんが言いました。

「マサエ、おばあちゃんの名前、知ってるでしょ。」

「うん。おばあちゃんの名前は、山田ミツ。―あつ。」

マサエは、パチンと手をたたいて、目をかがやかせました。

「おみつさんて、それじゃ、おばあちゃんのことだったの。あら、じゃあ、その大工さんて、おじいちゃん。」

おばあちゃんはうなずいて、おし入れのたなの上を指さしました。

「あの箱を持ってきてごらん。」

マサエは、すぐふみ台を持ってきて、たなの上から、ほこりだらけのボール箱を下ろしてきました。開けてみると、つうんとかびくさいにおいがして、赤いつま皮のかかったきれいな雪げたが、きちんとならんでいました。

「あら、きれいだ。かわいいね。」

「このうちへおよめに来るとすぐ、おじいちゃんが買ってくれたんだよ。だけど、あんまりうれしくて、もったいなくてね。なかなかはく気になれなかった。かざり物じゃないんだぞって、おじいちゃんに笑われたけど、そのうちにそのうちにと思っているうちに、年をとってしまっただけ。とうとうそれきりはかずじまいさ。」

「ふうん、だけど、おじいちゃんが、おばあちゃんのために、せつせと働いて買ってくれたんだから、この雪げたの中にも、神様がいるかもしれないね。」

「ああ、きつといなるだろうね。だから、はけなくなっても、こうして大事にしまっとくんだよ。」

そのとき、げんかんのたたきで、カツカツと雪げたの雪をはらう音がしました。

「おや、おじいちゃんのお帰りだよ。」

マサエは、赤いつま皮の雪げたをかかえたまま、

「おかえんなさい。」

ときけんで、げんかんへ飛び出していきました。



わらぐつの中の神様

すぎ
杉 みき子

雪がしんしんとふっています。

マサエは、おばあちゃんといっしょにこたつに当たりながら、本を読んでいます。

今夜は、お父さんはとまり番でかえってきません。お風呂好きのおじいちゃんは、「この寒いのにー。」と、みんなに笑われながら、さつきおふる屋さんへ出かけていきました。あとは、お母さんが台所で夕ご飯の後かたづけをしてる音が聞こえるだけで、辺りはとても静かです。

風が出てきたらしく、まどのしろうじがカタカタと鳴りました。雪がサラサラと雨戸に当たって落ちていきます。

マサエは、ふと思いついて、台所のお母さんをよびました。

「お母さん、わたしのスキーぐつ、かわいてる。あした、学校でスキーの日だよ。」

お母さんが、水音を立てながら答えました。

「おや、あしただったの。それじゃ、もう一度見てごらん。さつき、新聞紙を丸めて入れといたから、あらかたかわいたと思うけど。」

マサエは夕方まで、友達と近くのおかでスキーをしていました。今日は一度しか転ばなかったの、スキーぐつもズボンも、そんなにぬれないつもりでしたが、帰ってきて見たら、やっぱりいつものようにぐつしよりになっていたのです。

「かわいているといいけどな。あんなにおそくまで、すべてなきやよかった。」

マサエは、独りでそんなことを言いながら台所へかけて行って、しきいに立てかけてあるスキーぐつから、しめっぽい新聞紙の玉を五つ六つ取り出して、手をつっこんでみました。くつの中はじわりと冷たくて、せなかまでぶるつとなりそうです。

〈言葉の学習〉

しろうじ 部屋の仕切りに使う、木のわくに細い

さんをつけ、それに紙をはったもの。

雨戸 ガラス戸などの外側に雨風を防ぐためや、

戸じまりのために閉める戸。



「うへえ、つめたあい。お母さん、どうするう。」

「新しい新聞紙とかえてごらん。ひものところも、しっかりくるむようにしてね。あしたまでには、なんとかかわくだろう。」

「かわくかなあ。なんだか、まだびしょびしょみたいだよ。」

すると、茶の間のこたつから、おばあちゃんが口を出しました。
「かわかんかったら、わらぐつはいていきなさい。」
ど、あつたかくて。」

「やだあ、わらぐつなんて、みつたぐない。だれもはいてる人ないよ。だいいち、大きすぎて、金具にはまらんわ。」

マサエは、大きな声で言いながら、たんすのそばに重ねてある新聞紙を取ってきて、くるくる丸めては、せつせとスキーぐつの中につめこみました。ぎゅうぎゅう力を入れておしこむと、ぬれたビニル皮がぽっこりとふくらんで、まだいくらでも入りそうです。おばあちゃんが、また言いました。

「そういったもんでもないさ。わらぐつはいいもんだ。あつたかいし、軽いし、すべらんし。そうそう、それに、わらぐつの中には神様がいなさるでね。」

「わらぐつの中に、神様だって。」
マサエは、新聞紙の玉をすっかりつめこんでしまつて、こたつへもどつてきました。ぬれた物をいじつた手が、つうんとこおりそうです。

「そんなの迷信めいでしょ、おばあちゃん。」
「おやおや、なにが迷信めいなもんかね。正真正正めいい、ほんとの話だよ。」

おばあちゃんは、まじめな顔になつて、眼鏡を外しました。

「それじゃあ、ひとつ、わらぐつの話をしてやるかね。わらぐつの中に神様のいなさつた。話いをね。」

そこへ、お母さんも台所をすませて、赤くなった手をふきふき、こたつに入ってきました。

「どれどれ、わたしも聞かせてもらいましょうかね。ーそういえば、おじいちゃんは、おふろおそいわね。こんでるのかしら。」

「なあに、おじいちゃんは昔から長湯が好きでね。こもうとこむまいと、ゆつくり楽しんでなさるのさ。じゃあ、話そうかね。」

おばあちゃんはそう言って、雪の音にちよつと耳をすましてから、こんな話をはじめました。

おばあちゃんの思い出話を中心に、その前後に現在のマサエの家庭の話配した構成になっている。

登場人物

マサエ おばあちゃん お母さん

マサエは

スキーぐつをかわかしている。

スキーぐつをかわかすために、

新聞紙をスキーぐつの中に丸めて入れる。

おばあちゃんは

かわかなかつたら、わらぐつをはいていきなさい。

《新しい漢字》コウ構成

《特別な読み方をする漢字》

めがね眼鏡



―昔、この近くの村に、おみつさんというむすめが住んでいました。おみつさんは、特別に美しいむすめというわけでもありませんでしたが、体がじょうぶで、気立てがやさしくて、いつもほがらかにくると働いていたので、村じゅうの人たちから好かれていました。

さて、このおみつさんが、ある秋の朝、町の朝市へ、野菜を売りに出かけました。もう冬が近いので、すれちがう人たちも、なんだか気ぜわしそうに前かがみになって歩いていきます。おみつさんの足も、それにつられたように自然と速くなりました。

町へ入るとすぐの四つ角に、げた屋さんがあって、大きなげたの形をした、すすけたかん板が出ています。その前を通るとき、おみつさんはふと足を止めました。入り口近くの台の上に、かわいらしい雪げたが一足かざってあるのが目についたのです。

白い、軽そうな台に、ぱっと明るいオレンジ色のはなお。上品な、くすんだ赤い色のつま皮は、黒いふつさりとした毛皮のふち取りでかざられています。見ただけで、わかいむすめさんの、はなやかな冬によそおいが、目の前にうかんでくるようです。

おみつさんは、その雪げたがほしくてたまらなくなりました。「でも、きつとたかいんだらうな。」

うら返しになっているねだんの札を、あかぎれの指でそっとめくってみると、思ったとおり、とてもとても、おみつさんのこづかいで買えるねだんではありません。「負けてくれと言ったって、とてもだめだらうしねえー。」

〈言葉の意味〉

つま皮

雨やどろをよけるために、げたのつま先に付けたおおい。

ふつさり

ふさふさしている様を表す言葉。



おみつさんは、しばらくそこに立って、すい付けられたようにその雪げたをながめていました。

「いらっしやい。何をあげますかいね。」

おみつさんがあんまり長いこと立っていたので、店のおくからおかみさんが出てきて声をかけました。おみつさんは、真っ赤になって、口の中で何かもごもごも言いながら、にげるように店の前をはなれました。

けれども、市で野菜を売っている間も、あの雪げたのことが、おみつさんの頭をはなれません。いつもは、よけいな物など、欲しいと思つたことのないおみつさんなのに、どうしたことか、この雪げたばかりは、なんとしてもあきらめられないのです。

市の帰りに、おみつさんは、またあの店の前を通りました。ほかのお客にまぎれて、ちらりと目をやると、赤いつま皮の雪げたは、朝と同じ所に、ちゃんとぎょうぎよくならんでいます。

「ねえ、わたしを買ってください。あんたが買ってくれたら、うれしいな。」

おみつさんには、雪げたがそうよびかけているように思われました。

家に帰つたおみつさんは、思い切つて、お父さんとお母さんに、雪げたのことをたのんでみました。

「なんだ、雪げたなんて。そんなぜいたくなもん、わざわざ買うことはねえだろう。」

お父さんは、そう言つて相手にしてくれませんか。

「物ねだりしたことのないおみつのことだから、買ってやりたいのはやまやまなんだけどね。――まあ、おまえが町へよめに行くようなことにならねえ。」

おかあさんは、言葉をにごしています。

「姉ちゃんが買うんなら、おらにも買って。」

「きれいな雪げた、あたいもはいてみたいな。」

小さい弟と妹がわいわい言い出したので、おみつさんも、もう自分のねだり事どころではなく、一生けんめい、子どもたちのなだめ役にまわらなくてはなりませんでした。

その夜、おみつさんは考えました。「うちのくらしだって、大変なんだもの。買ってもらえないのも無理はない。そうだ、自分で働いて、お金を作ろう。そして、あの雪げたを買おう。」

おみつさんのお父さんは、わらぐつを作るのが上手でした。おみつさんも、いつもそれを見ているので、作り方くらいは分かります。おみつさんは、さつそく、毎晩、家の仕事をすませてから、わらぐつを作り始めました。

お父さんの作るのを見てみると、たやすくできるようですが、自分でやってみると、なかなか思うようにはいきません。でも、おみつさんは、少しくらい格好が悪くても、はく人がはきやすいように、あつたかいように、少しでも長持ちするようにと、心をこめて、しっかりとしつかり、わらを編んでいきました。

さて、やっと一足作りあげてみると、われながら、いかにも変な格好です。右と左と、大きさもちがうし、なんだか首をかしげたみたい、足首の上のところが曲がっています。底もでこぼこしていて、ちゃんと置いてもふらふらするようです。その代わり、上からつま先まで、すき間なく、きつちりと編みこまれていて、じょうぶなことは、このうえなしです。

「そんなおかしなわらぐつが、売れるかなあ。」

うちの人はそう言って、笑ったり心配したりしましたが、それでもおみつさんは、朝市の立つ日になると、野菜を入れた大かごにそのわらぐつを結び付けて、元氣よく町へ出ていきました。

げた屋さんの前を通るとき、横目で見ると、あの雪げたは、まだちゃんとそこにあります。おみつさんは、その雪げたが、ほんのちよっぴり自分の手のとどく所へ出てきたような気がして、楽しくなりました。



それから、まっすぐ朝市に出てきたおみつさんは、いつものがんぎの下に、むしろを広げて野菜をならべ、そのはしっこにわらぐつを置きました。そして、野菜を買ってくれる人があると、

「わらぐつはどうですね。」

とすすめてみるのですが、こちらはなかなか売れません。くすくす笑ったり、あきれた顔をしたりして、

「いいや、よかったでね。」

と**断る**のはまだいいほうで、なかには、

「へええ、それ、わらぐつかね。おらまた、わらまんじゅうかと思っ
た。」

などと、あけすけなことを言う、口の悪い人もいます。「やっぱり、わたしが作ったんじや、だめなのかなあ。」おみつさんはがっかりして、**不細工**なわらぐつを見つめました。

やがて、お昼近くになって、野菜はほとんど売れてしまったし、あきらめてもう帰ろうかと思っていると、おみつさんのむしろの前に、わかい男の人が立ちました。どうやら大工さんらしく、いせいのいいねじりはちまきに、大きな道具箱をかついでいます。

「あねちや、そのわらぐつ、見せてくください。んない。」

そう声をかけられると、おみつさんは、やはりきまりが悪くなって、「あんまり、みつともよくねえわらぐつでー。」

と赤くなりながら、おずおずとわらぐつを差し出しました。

〈言葉の意味〉

がんぎ

雪の深い地方で、のきのひさしを長く出し、その下を通路にするために使われている木の屋根のこと。

むしろ いぐさ・わらなどで編んだしきもの。

あけすけ 何でもすばずばと言うようす。



《新しい読み方の漢字》

断ること

不細工サイ

おばあちゃんの話

おみつさん 特別美しい娘ではない

でも

- 体がじょうぶ
- 気立てがやさしい
- いつもほがらにくるくる働く

←

村じゅうの人にたちから好かれていた

おみつさんは かわいらしい雪げたをみつけた。

どうしてもほしい



お父さん 「そんなぜいたくなものを、買うことはない。」
お母さん 「おまえが町によめに行くようなことになったらね。」

自分で働いてお金を作って、あの雪げたを買う。

わらぐつを作る。

おみつさんのわらぐつ 【変な格好】

- ・ 右と左が大きさが違う
- ・ 足首の上のところは曲がっている⇕
- ・ 底がでこぼこ。

きっちり編みこまれてじょうぶ

わかい大工さん

「あねちや、そのわらぐつ、見せてくんない。」

「あんまり、みっともよくねえわらぐつでー。」と赤くなりながら、
おずおずとわらぐつを差し出しました

わかい大工さんは、道具箱をむしろの上に置いて、そのわらぐつを手にとると、たてにしたり横にしたりして、しばらくながめてから、今度はおみつさんの顔をまじまじと見つめました。

「このわらぐつ、(おまえさん)(作った)おまんが作んなったのかね。」

「はあ、おらが作ったんです。初めて作ったもんで、うまくできねかったけどー。」

「ふうん、よし、もらつところ。いくらだね。」

大工さんはお金をはらつて、わらぐつのひもを慣れた手つきで結び合わせ、道具箱といっしょにひよいとかつぐと、さつさと行ってしましました。

おみつさんは、初めてわらぐつが売れたので、うれしくてうれしくて、わかい大工さんをおがみたいような気がしました。

その次の市の日までに、おみつさんは、また一つ、わらぐつを編みあげました。前のよりは、いくらか形よくできました。「今度もうまく売れるといいいけどー。」

おみつさんが、わらぐつを持って市に出て、この前のように野菜といっしょにならべておくと、今度はあまり待たないうちに声をかけられました。

「そのわらぐつ、くんない。」

ひよいと顔を上げてみると、まあ、どうでしょう。それは、この間もわらぐつを買ってくれた、あのわかい大工さんなのです。おみつさんはおどろきました、言われるままに、またわらぐつを売って、お金を受け取りました。



その次の市の日も、またあの大工さんが来て、わらぐつを買ってくれました。その次も、またその次も、おみつさんが市に出るたびに、あの大工さんが必ずやって来て、不格好なわらぐつを買ってくれるのです。おみつさんは、いつの間にか、その大工さんの顔を見るのが楽しみになっていました。こんなに続けて買ってくれるのが不思議でもあるので、とうとうある日、思い切ってたずねてみました。

「あのう、いつも買ってもらって、ほんとにありがとう인데、あの、おらの作ったわらぐつ、もしかしたら、すぐいたんだりして、それで、しょっちゅう買ってくんなさるんじゃないんですか。もし、そんなんだったら、おら、もうしわけなくてー。」

すると大工さんは、にっこりして答えました。

「いやあ、とんでもねえ。おまんのわらぐつは、とてもじょうぶだよ。」

「そうですかあ。よかった。でも、そんなら、どうしてあんなにたくさんー。」

すると、大工さんはちよつと赤くなりました。

「ああ、そりや、じょうぶでいいわらぐつだから、仕事場の仲間や、近所の人たちの分も買ってやったんだよ。」

「まあ、そりやどうもー。だけど、あんな不格好なわらぐつでー。」

おみつさんがきょうしゆくすると、大工さんは、急にまじめな顔になって言いました。

「おれは、わらぐつこさえたことはないけども、おれだって**職人**だから、仕事のよしあしは分かるつもりだ。いい仕事するのは、見かけで決まるもんじゃない。使う人の身になって、使いやすく、じょうぶで長持ちするように作るのが、ほんとのいい仕事ってものだ。おれなんか、まだわかぞうだけど、今にきつと、そんな仕事のできる、いい大工になりたいと思っっているんだ。」

おみつさんは、こっくりこっくりうなずきながら聞いていました。自分といくらも年のちがわないこの大工さんが、なんだかとてもたのもしくて、えらい人のような気がしてきたのです。

それから、大工さんは、いきなりしやがみこんで、おみつさんの顔を見つめながら言いました。

「なあ、おれのうちへ来てくんないか。そして、いつまでもうちにいて、おれにわらぐつを作ってくんないかな。」
おみつさんは、ぽかんとして、大工さんの顔を見ました。そして、しばらくして、それが、おみつさんによめに来てくれということなんだと気がつく、白いほおが夕焼けのように赤くなりました。

「—それから、わかい大工さんは言ったのさ。使う人の身になって、心をこめて作ったものには、神様がはいっているのと同じなんだ。それを作った人も、神様とおなじだ。おまんが来てくれたら神様みたいに大事にするつもりだよ、ってね。どうだい、いいはなしだろ。」
おばあちゃんは、そう言ってお茶を飲みました。

「ふうん、それで、おみつさん、その大工さんのところへおよめに行ったの。」

マサエが、目をくりくりさせてきました。

「ああ、行ったともさ。」

「それで、大工さん、おみつさんのことを、神様みたいに大事にした。」

「そうだねえ、神様とまではいかないううだったけど、でも、とてもやさしくしてくれたよ。」

「ふうん、じゃあ、おみつさん、幸せにくらしたんだね。」

「ああ、とっても幸せにくらしてるよ。」

「くらしてる。じゃ、おみつさんて、まだ生きてるの。」

「生きてるともね。」

「へえ。どいに。」



おばあちゃんは、にこにこして笑っています。マサエは、お母さんの顔を見ました。お母さんも、にこにこ笑っています。

「変なの、教えてくれたっていいでしょ。」
そこで、お母さんが言いました。

「マサエ、おばあちゃんの名前、知ってるでしょ。」

「うん。おばあちゃんの名前は、山田ミツ。―あつ。」

マサエは、パチンと手をたたいて、目をかがやかせました。

「おみつさんて、それじゃ、おばあちゃんのことだったの。あら、じゃあ、その大工さんて、おじいちゃん。」

おばあちゃんはうなずいて、おし入れのたなの上を指さしました。

「あの箱を持ってきてごらん。」

マサエは、すぐふみ台を持ってきて、たなの上から、ほこりだらけのボール箱を下ろしてきました。開けてみると、つうんとかびくさいにおいがして、赤いつま皮のかかったきれいな雪げたが、きちんとならんでいました。

「あら、きれいだ。かわいいね。」

「このうちへおよめに来るとすぐ、おじいちゃんが買ってくれたんだよ。だけど、あんまりうれしくて、もったいなくてね。なかなかはく気になれなかった。かざり物じゃないんだぞって、おじいちゃんに笑われたけど、そのうちにそのうちにと思っているうちに、年をとってしまっただけ。とうとうそれきりはかずじまいさ。」

「ふうん、だけど、おじいちゃんが、おばあちゃんのために、せつせと働いて買ってくれたんだから、この雪げたの中にも、神様がいるかもしれないね。」

「ああ、きつといなるだろうね。だから、はけなくなっても、こうして大事にしまっとくんだよ。」
そのとき、げんかんのたたきで、カツカツと雪げたの雪をはらう音がしました。

「おや、おじいちゃんのお帰りだよ。」

マサエは、赤いつま皮の雪げたをかかえたまま、

「おかえんなさい。」

ときけんで、げんかんへ飛び出していきました。



大工さん わらぐつを買ってくれた。

次の日もその次の日も・・・

おみつさんが市へ出る ↓

大工さん わらぐつを買ってくれた。

おみつさん

すぐいたんだりして、しょっちゅう買ってくれるのですか？

大工さん

いいわらぐつだから、仕事場の仲間、近所の人たちの分も買っている

「おれだって職人だから、仕事のよしあしは分かるつもりだ。いい仕事ってのは、見かけで決まるもんじゃない。使う人の身になって、使いやすい、じょうぶで長持ちするように作るのが、ほんとのいい仕事ってもんだ。おれなんか、まだわかぞうだけど、今にきつと、そんな仕事のできる、いい大工になりたいと思っっているんだ。」

おれのうちへ来てくんないか。いつまでもうちにいて、おれにわらぐつを作ってくんないかな。

おみつさん

よめに来てくれということに気づいた。

マサエ

おみつさんは、その大工さんのところにおよめに行っの。
神様みたいに大事にした。
幸せにくらしたんだね。

おばあちゃんの名前

山田ミツ

⇐

おみつさん おばあちゃん
その大工さん おじいちゃん

「あの箱を持ってきてごらん」

赤いつま皮のかかったきれいな雪げた

およめにきてすぐ、おじいちゃんが買ってくれた
もったくなくてはく気になれなかった



この雪げたの中にも神様

⇔

おじいちゃんがせつせと働いて買ってくれた

宿題

次回の授業までにやる勉強です。

1. 音読

「わらぐつの中の神様」を読みましょう。

*長い話ですが、楽しく読めると思います。なるべくたくさん読んでください。

2. 言葉の学習

次の言葉の意味を調べましょう。

- ① あらかた
- ② 迷信めい
- ③ 正真正正めい
- ④ 朝市
- ⑤ 気立て
- ⑥ 気ぜわしい
- ⑦ すすけた
- ⑧ あかぎれ
- ⑨ なだめる
- ⑩ きょうしゆく



お知らせ

1. 質問があったら、メールをください。すぐお返事します。
 2. 自分が書いた文章を見てもらいたいときはメールで送って
くれば、直して送り返します。
- ❖ メールアドレスは、 Akiko@JPNCClass.com です。
 - ❖ このビデオのスライドはWebページ <http://JPNCClass.com> から
ダウンロードや印刷ができます。



JPN Class

Online school - 日本語で学ぼう

国語の学習

小学校

五年生

年間学習表



身につけたい力

7月	6月	5月	4月		
		<p>新聞記事から 新聞記事の見出しの 違いについて考えた ことを発表しよう。</p>	<p>自分の意見を持つとう 自分の意見を発表し よう。話し手の意図 を聞き取ろう。</p>	<p>1年間の学習を通し て 先生の話を聞き、学 習を進めよう。</p>	<p>話す／聞く</p>
<p>こんな道があつたら 町の様子を観察し、 気が付いたことや 思ったことを書こう。</p>	<p>大陸は動く 前半と後半に分けて、 書いてあることを短 くまとめよう。</p>	<p>新聞記事から 新聞記事を短くまと めよう。(要約しよ う。)</p> <p>詩を楽しもう 見たり感じたりした ことをもとに、心の つぶやきを言葉にし よう。</p>	<p>やどかり探検隊 物語を読んで、感じ たことや考えたこと を書こう。</p> <p>記録しよう 心に残ったことを、 書留めよう。</p>	<p>新聞記事 記事の要約をし、記 事に対する自分の意 見を書こう。</p>	<p>書く</p>
<p>麦畑 情景を思いうかべな がら読もう。登場人 物の心情と情景が一 体のものでえがかれ ていることを読み取 ろう。</p>	<p>地図が見せる世界 筆者が最も言いたい ことは、どういうこ とだろう。</p> <p>大陸は動く 筆者はどんな考えで、 「大陸は動く」とい う題名をつけたのだ ろう。</p>	<p>詩を楽しもう 文語の詩を読もう。 「自分」の伝え方に ついて考えよう。</p>	<p>やどかり探検隊 主人公の気持ちかを考 え、自分と重ね合わ せて読もう。</p>	<p>新聞記事 記事の内容を読み取 ろう。</p>	<p>読む</p>
<p>仮名づかいの決まり 発音と違う書き方を する、言葉について 知ろう。</p>	<p>つなぎ言葉 つなぎ言葉の働きを 知り、つなぎ言葉を 使えるようになるう。</p>	<p>同じ音の漢字 同じ音を持つ漢字そ れぞれの意味と使い 方を知ろう。</p>			<p>言葉</p>

12月	11月	10月	9月	8月	
<p>目的を考えて話し合おう 目的にそった、有意義な話し合いにするための方法を知ろう。</p>					話す／聞く
<p>わらぐつの中の神 自分の身近な物について、それがどういうものかが読む人にかかるように書こう。</p>	<p>調査したことをまとめよう 調査したいことを決めて、調べたことを作文に書こう。</p>	<p>大造じいさんとガン 大造じいさんの気持ちの移り変わりをまとめよう。</p>	<p>身近な環境 身近な環境について調べ、わたしたちができることは何か書こう。</p>	<p>読書記録 読書記録の書き方を知り、自分の同署記録を書こう。 おみやげ 宇宙人の宿題 「宇宙人」「戦争」「現代文明」について思ったこと、考えたことを書こう。</p>	書く
<p>わらぐつの中の神様 おばあちゃんの思い出話と、その前後の現在の話を配した構成を理解しよう。</p>	<p>「その人」と出会って 筆者が手話を通して心を通わせた経験と、それにもとづいた感動を読み取ろう。</p>	<p>大造じいさんとガン 情景を思いうかべながら読もう。</p>	<p>一秒が一年をこわす わたしたちの周りで実際に起きている問題を考えよう。</p>	<p>おみやげ 宇宙人の宿題 宇宙人に目を向けた二つの作品を読み比べよう。</p>	読む
	<p>熟語を使って 熟語の読み方と意味を知ろう。</p>	<p>敬語 正しい敬語の使い方を知らう。日常生活で使っている敬語をまとめよう。</p>	<p>漢語と和語 漢語と和語について知り、意味の違いを調べよう。</p>	<p>漢字のなりたち 今わたしたち使っている漢字が、どのように作られたのか知ろう。</p>	言葉

	3月	2月	1月	
	朗読をしよう 一年間 学習 した物語の中で、 一番好きな作品の 朗読をしよう。			話す／聞く
	月夜のみみずく 作品全体から感じ たこと、場面ごと の印象を書こう。	リレー物語を作ろう もらった物語の続 きを書こう。 推敲をしよう 書いた作文を、よ り良い文章になる ように推敲しよう。	言葉と気持ち 自分の気持ちや意 図を相手に伝える 短い文を書こう。	書く
	月夜のみみずく 「わたし」が「と うさん」と森に 入った初めての経 験、雪の森の中で 見た世界を想像し よう。	詩の広場 うれしいときや悲 しいとき、わたし たちの心は何を感 じ、目にはどんな 風景がうつってい るのか、考えよう。	言葉と気持ち 三つの事例を通し て、筆者は何を うったえようとし たのか考えよう。	読む
五年生の漢字 五年生で習った漢 字の復習をしよう。		言葉の組み立て 複合語の意味、ど んなふうにするの か考えよう。	漢字の読み方と使い 方 言葉によって読み 方が変わる漢字を 知り、正しく使い えるようになるう。	言葉